

# 奈良の石佛

西村貞著



全國書房版

## 序

わが國における佛像彫刻——とくに木彫佛は、概して國家の手厚い庇護のもとに成育したものである。上代はさて措き、平安時代から鎌倉時代へかけても、造像については、宮廷をはじめ奉り、貴紳權門の力が多く加はつて之が造顯をみるに至つたものである。

しかし、石佛は、それとはよほど趣きを異にしてゐる。そこには若干の例外があるにしても、大部分は民間の造立である。民間信仰に哺まれて所産されたる造形作品である。それゆゑその造像の願主僧にしても、僧正もしくは僧都といふがごとき高い僧階をもつ淨侶の名はあらはれてはこない。せいぜい權僧都かそれとも權律師か、大法師といった比較的下級の繙徒が大多數を占めてゐるのである。斯かる事情は、石佛なるものが専ら民間側の信仰的所産であることを物語つて餘蘊なきものとおもはれるが、他面、また斯かる點が、石佛に對して恰も作品としての良否を決する規準をでも示すかに考へられて、從來、石佛といへば一概にこれを疎んずる風のあつたことは蔽ふ可からざる事實であらう。なる程わ

れわれが今日路傍でみかける石地藏や石観音のうちには、他の彫像と比較して、おしなべて藝術作品としての水準が低下し、甚だしく見劣りのする場合が必ずしもないではない。さうしてまたさういふ點が、石佛なるものの識者側より冷遇されて、謂ゆる下手物扱ひをうけ、繼子扱ひを受けつつある素因をなすものと信ぜられる。さりながら斯かる石佛のうちにも、たとひそれが路邊に所在して名もなき石匠の所彫に係るものであるとは云へ、信仰上の觀點や藝術的見地よりみて、きはめて高い文化史的價値、藝術史的價値をもつものが尠くはない。それは藥師寺佛足石に認めらるる如く、正史の闕を補ひ、時としては正史の誤りをさへも匡す場合がある。

佛教文化の淵叢地たる奈良縣下に於いて、頭塔の石佛、地獄谷及び春日山の石窟佛、十輪院の石龕、さては大野の磨崖像といへるがごときものは、今日では史蹟名勝天然紀念物法または國寶乃至重要美術品指定等の法規に依り、これが國家の保護をうけて立派に保存の道が講ぜられてゐる。それにも拘らず、一般世人の石佛に對する關心に至つては頗る微微たるものであつて、殊にこころなき破壊が石佛に加へらるること頻々たる現今の状態をみるにつけても、世人の石佛に對する愛護の念の甚だ稀薄なるを憂へざるを得ないありさまである。かくの如き現状は實に世人の石佛への無關心、無頓着と云はんよりは、寧ろ學

者の怠慢に起因するものといふも決して過言ではない。事實、山間僻地に所在する諸石彫像に至つては、今尙まつたく閑却放置せられて保護の圏外におかれをり、一部の金石文研究者の探索をのぞいては、未だ十分に調査が行届いてはをらぬ始末である。従つてこれら石佛の大部分は、雨風の侵蝕と人爲の破壊とにゆだねられて、日毎に湮滅してゆく状態である。これが研究調査は日本文化史上の重要な一課題たるべきものであつて、就中、様式手法上に日本独自の發達を示すものあるにおいては、固よりその保存の肝要なること贅言するまでもあるまい。今次聖戰勃發して、北支に皇軍の作戰をみるや、大同龍門の石窟彫像が逸早く皇軍の庇護下におかれて、これが保存と調査に萬全の措置がとられしことはいまもなほ吾人の耳目に新なるものがあるであらう。人爲による破壊は極力これを阻止しなければならぬ。それには先づ何よりも石佛自體に對する理解を與へることによつて、祖先の文化的遺産を愛護する觀念を喚起し、先人の芳躅を承けついで之を見孫に傳へんとする信念を育成することが必要である。近時、石佛に對し無益の惡戯に基く償ふべからざる毀損を加へて、しかもなほ恬として恥ぢざる風潮のある際、もし本書が上述のごとき弊風の匡正に聊かたりとも役立つところがあるとするれば、著者としては洵に望外のよろこびである。

本書は、大正十五年度と最近の兩回にわたる實地踏査にかかる調査を基礎として、新しく稿を起して舊著南都石佛巡禮を修訂増補せしもので、主として奈良時代より室町時代に亙り、奈良縣下を中心としてそれに接續する地方の石佛を採録したものであるが、二三江戸時代造立のもので逸しがたい作例とおもへるものは之を収録するに努めた。だいたいに於いて石佛の所在する地點は一般に交通の便がわるく、山間地方がその大部分を占めてゐるが、行脚にあつては、能ふ限り精密なる實測圖の交通系の改訂版を携帯することがしごく緊要であらう。

なほまた本書の著述に際しては、諸先輩の高教に負ふところ少くはないが、特に奈良東大寺の上司海雲師、橋本聖準師、筒井英俊師、新藥師寺の田島隆聖師より種々高配を賜つた。本書の上梓に關しては一に畏友廣津和郎氏の厚意に據るものである。また全國書房の田中秀吉氏が大なる犠牲を忍んで本書の出版を快諾せられしことも、予の深く記得せざるべからざるところである。挿入圖版の寫眞撮影に就いては箕輪修、安井隆兩君の獻身的協力に俟つこと甚だ多い。以上附記して衷心よりの謝意を表する。

昭和十八年癸未如月下流

西村貞識

## 奈良の石佛 容目

序	一
石佛總說	一
頭塔の石佛	三
頭塔入口の双佛石——新藥師寺の石佛——白毫寺村の十王石像	
十輪院の石佛龕と諸石彫	八
興善寺の彌陀三尊石佛——靈殿院の彌陀三尊石佛——傳香寺の石地藏——極樂院の石佛——	
荒池地藏——弘法爪がき地藏——鎧地藏	
般若寺十三重石塔四方佛と笠卒堵婆	一〇
興善院町の夕日地藏——五劫院の見返り地藏と墓地の石地藏——空海寺の石佛	
佛頭石と洞の石地藏	一三
佛像石と地藏の脊の石佛——春日本地地藏石——まんなをし地藏——三體山の彌陀三尊石佛	

瀧坂の諸磨崖佛と朝日觀音

地獄谷聖人窟の佛龕像

春日山石切峠の穴佛

南田原の磨崖彌陀像

野の石佛——牛ヶ峯樹形岩の大日如來石像——邑地の慶安樂寺石佛——柳生中村の菴窟地

藏——柳生中村の磨崖彌陀像——柳生下のあたや地藏——慶中川寺の地藏石像——伊賀新大佛寺の岩屋不動

大野寺の磨崖彌勒像

室生寺附近の石佛——山邊の濡れ地藏——向淵の三體地藏石——飯降の石樂師

宇智川の磨崖涅槃經碑

多武峯の傳高麗將來の彌勒石像

西口經堂ヶ谷の不動石像——念誦窟墓地の石地藏——多武峯村西口の石地藏

壺坂寺の五百羅漢石と兩部曼陀羅石

赤尾の矢取地藏——岡寺の石佛——慶神護院の善光寺如來石像

金屋彌勒谷の石佛

金屋の海柘榴市觀音堂の十一面觀音石像——長谷寺の十一面觀音石像——見かへり不動石像

——多武峯道の釋迦石像——聖林寺の子安地藏

釜口長岳寺の彌勒石像

奥院不動石像——長岳寺墓地の石佛——光蓮寺の彌陀石像

忍坂石位寺の寺傳樂師三尊石像

富雄王龍寺の磨崖十一面觀音像

法庵寺の役行者石像——阿彌陀寺の役行者石像——安養寺の十一面觀音石像——福滿寺の石

地藏——鳴川千光寺のゆるぎ地藏と十三佛石——千光寺勸請行場の磨崖佛——横原金勝寺の

磨崖佛

矢田山瀧寺の磨崖佛

金剛山寺の味噌なめ地藏——圓通寺の旗かけ地藏——つじんどうの石地藏——龍田五百井の

石地藏——吐田の油掛地藏

西ノ京樂師寺の佛足石

尼ヶ辻の縁切り地藏——極樂寺の石地藏——郡山洞泉寺の垢抓地藏——南生駒石佛寺の彌陀

三尊石像

淨瑠璃寺附近の石佛

淨瑠璃寺道の彌陀坐像——富尾村東小の藪の地藏——はとけ谷の彌陀坐像——富尾村宇東小

の唐白の靈の石佛——彌陀三尊石像——岩船寺の不動石像——富尾村の磨崖彌勒像

南山城笠置寺の磨崖佛

三六一



泉橋寺の地藏石像——西和東村瀧堂の磨崖彌勒石像

南河内鹿谷寺址の三尊石佛

岩屋峠の洞窟佛——富田林淨谷寺の石地藏——石佛寺の彌陀石像——入尾驛地藏院の石地藏  
——慶西方寺の石地藏——石船巖の石佛——打上明光寺の十三佛石

索引

.....

圖版

富雄王龍寺磨崖十一面觀音像頭部 (安井隆氏撮影)

忍坂石位寺寺傳藥師三尊像 (飛鳥園寛氏撮影)

頭塔西面下段三尊像 (松岡光夢氏撮影)

富雄王龍寺磨崖十一面觀音像 (鈴木富喬氏撮影)

十輪院石佛龕部分 (箕輪修氏撮影)

南山城當尾の唐臼の壺の彌陀像 (同)

南山城當尾の藪の地藏と彌陀像 (同)

春日山石切峠穴佛西洞 (同)

頭塔東面下段三尊像 (松岡光夢氏撮影)

當尾の磨崖彌勒像 (拓影)

地獄谷聖人窟中尊像 (拓影)

南生駒石佛寺の彌陀三尊像 (安井隆氏撮影)

岩船寺彌陀三尊像 (箕輪修氏撮影)

春日山石切峠穴佛多聞天像 (橋岡實三氏撮影)

春日山石切峠穴佛部分 (箕輪修氏撮影)

般若寺十三重石塔四方佛部分 (同)

笠置寺寺傳虚空藏菩薩像 (安井隆氏撮影)

般若寺十三重石塔と卒塔婆 (箕輪修氏撮影)

東大寺南大門石獅 (安井隆氏撮影)

郡山洞泉寺垢抓地藏 (鈴木峰美氏撮影)

尼ヶ辻の石地藏 (同)

岩船寺不動像 (箕輪修氏撮影)

豊後深田の石佛 (松岡光夢氏撮影)

豊後深田の石佛頭部 (同)

多武峯傳高麗將來の彌勒像 (山崎忠明氏撮影)

多武峯經堂ヶ谷の不動像 (同)

三條町彌勒堂の涅槃石 (拓影)

空海寺石佛龕三尊像 (箕輪修氏撮影)

三體山の彌陀三尊像 (同)

瀧坂朝日觀音 (同)

南田原磨崖彌陀像 (同)

南山城當尾の藪の地藏 (同)

歌草山南麓の洞の石地藏 (安井隆氏撮影)

空海寺石地藏 (同)

金屋彌勒谷二尊像 (飛鳥園寛氏)

西和東の磨崖彌勒像 (鈴木富喬氏撮影)

頭塔南面中段一尊像 (松岡光夢氏撮影)

佛頭石 (扉圖)

挿 圖

豊後深田の石佛……………二四  
 頭塔南面下段西寄苦行像……………二五  
 頭塔西面下段の涅槃像(拓影)……………二六  
 頭塔西面下段三尊像……………二六  
 頭塔南面中段西寄石佛……………二六  
 新薬師寺の地藏石像……………二七  
 十輪院石佛龕……………二七  
 春日本地曼陀羅石……………二八  
 十輪院不動石像……………二九  
 靈巖院彌陀三尊石佛……………二九  
 傳香寺石地藏……………三〇  
 船若寺十三重石塔四方佛(拓影)……………三〇  
 船若寺出土古瓦(拓影)……………三一  
 東大寺法華堂前石燈……………三二  
 興善院町の夕日地藏……………三三  
 五劫院の見返り地藏……………三三  
 五劫院墓地の石地藏……………三三  
 空海寺石佛龕多聞天像(拓影)……………三四  
 佛頭石柱部六觀音(部分)……………三四  
 佛頭石……………三七  
 春日本地地藏石……………三九

瀧坂街道の寢佛……………三五  
 瀧坂磨崖彌陀像……………三五  
 瀧坂街道の地藏石像……………三五  
 地獄尊聖人窟右壁菩薩形坐像……………三六  
 春日山石切峠穴佛地藏像……………三六  
 新大佛寺獅子文石座……………三六  
 大野寺彌勒像細部(拓影)……………三六  
 大野寺彌勒像頭部(拓影)……………三六  
 山邊濡れ地藏……………三七  
 磨崖經碑佛像(拓影)……………三七  
 磨崖經碑部分(拓影)……………三九  
 宇智川磨崖經碑全景……………三九  
 壺坂寺五百羅漢石……………三九  
 長谷寺十一面觀音石像……………四〇  
 釜口長岳寺の彌勒石像……………四〇  
 長岳寺墓地の石地藏……………四一  
 安養寺の十一面觀音石像……………四一  
 千光寺のゆるぎ地藏側面圖……………四二  
 瀧寺の磨崖佛(拓影) 東大寺圖 海館所蔵……………四二  
 淨瑠璃寺道の彌陀坐像……………四二  
 笠置寺彌勒石像 仁和寺本彌勒菩薩畫像集所載……………四二  
 笠置寺傳虚空藏像蓮座細部……………四三  
 泉橋寺の石地藏……………四三

の像を刻んだものであるかも知れない。だがそれはとにかくこの彌勒像が大野の磨崖線刻像の石彫上の系統をひくものなることだけは確實である。像容にも幅があり、衣褶の刻線もしごく雄麗で尋常一様の凡作ではない。光背の縁邊に左のごとき刻銘がある。

願以此功德 普及於一功 我與等衆生 皆但成佛道

文永十一年<sup>甲戌</sup>二月五日爲慈父上生永<sup>濟</sup>造之 大工□□□

尊像のかたはらにある雜木の類には、草鞋をくくりつけて賽してあるのをみうけるが、南田原の磨崖彌陀像にみるがごとく、これは云ふ迄もなく建脚を祈願するところである。ここより奈良へは鳴川、中の川の諸村を経て約二里の行程である。

## 南山城笠置寺の磨崖佛

泉橋寺の地藏石像——西和束村瀧堂の磨崖彌勒石像

吉野朝の遺跡で名高い笠置寺は、京都府下の相樂郡笠置村大字南笠置にある。寺記によると白鳳年間の草創で、むかしは僧房四十九院をかぞへ、山に據り崖に架して堂塔伽藍が營まれてあつたが、兵火のために衰亡し、近世までなほ數院を存してをつたが、それも嘉永七年の地震に顛滅して、現在ではわづかに福壽院といふ笠置寺塔頭の一院だけが残つてゐる。これが現在の笠置寺である。木津川の碧潭を控へて、三面絶壁をなす峻峰の山頂にたつてゐる。省線笠置驛より十數丁、いま新道ができて登攀が割合にらくとなつたが、それでも坂路は相當に峻岨である。

山頂に奉祀せる當山の鎮守椿本殿の祠前より左折して北にすすむと、林間に一大巨巖の斷崖上に横はるのをみるが、これは藥師石と稱して、高さ四十尺、幅三十一尺、藥師佛の



立像を線刻したものである。その隣りにあるものは文殊石といつて、高さ二十二尺、幅十六尺、文殊菩薩の立像を彫出せるものである。そしてこの附近にある最も巨大なるものを彌勒石と呼び、高さ五十二尺、幅四十二尺の雄偉驚くべき巨巖である。これは巖面を壺形に彫り凹めて磨きあげ、そのうちに彌勒菩薩の立像を線彫してあつたものである。山州名跡志卷十六によると「立像八尺許」であつたといふ。この磨崖彌勒石像はもと當寺の本尊になるものである。文明十四年の述作とおもはれる笠置寺縁起寺誌叢書第二に徴すれば、天智天皇の皇子この山に遊獵せられて危難に遭ひ給ひ三寶の加護によつて救はれ給うた。よつてのちここに佛寺を營み、山をひらき給ひしとき、天人きたつて彌勒佛の尊像を刻んだものといひ、白鳳年中化人刻彫の尊像であると傳へてゐる。帝王編年記にも「天智天皇甲子天人降造笠置石像彌勒」と見え、また今昔物語卷十一にも前述縁起の文と同一の傳説をつたへて、この石像を化人の作と曰つてあるが、しかしこれらの所傳は、惟ふに其處に多少ともに寺家の潤色があつて、いかなる程度にまで憑依すべきものか甚だ惑はざるを得ないふしがある。だがそれはそれとして、ここにはふるく寺堂の經營があつたことだけは確かである。それは足立康氏によつて示された康和三年頃の著録になる彌勒菩薩畫像集大正新修大藏經圖六像卷にも、この彌勒石像の尊影が載せてあり、藤原宗忠の中右記元永元年閏九月廿七日の

條にも、妻子奴婢を伴ひ舟にて木津川を溯り笠置に登山せしことを述べたくだりに

廿七日、已着笠置津——登坂十町許、參着彌勒石像前——皆逢三會之曉、悉結一乘之緣、此趣令啓白、且致祈念、且行禮拜、事了暫留僧房

と出でて、今昔物語の記載と相竝んで、とにかく平安時代よりこの笠置寺本尊の彌勒石像が諸人渴仰の的となつてをたつたことが窺はれるからである。したがつて白鳳十二年役優婆塞が當山に登つて千手窟に詣でたといふ笠置寺縁起の記事はさて措き、同縁起に

聖武皇帝 爲東大寺大佛殿御建立。自伊賀國欲下材木。泉州之河上。當山之麓。

大岩山。河之面四町餘覆塞。而河流通岩下。船筏通无由。仍朝議煩之。于時良辨

僧正奉宣旨。籠笠置寺千手窟。行千手祕法。雷神下而摧破彼巖山。流河水之滯。

船筏之通無煩云々。東大寺之緣起第三卷二同記之 彼雷神者。善達龍王現小之身。從彼窟之龍穴。出

現。而千手堂正面之左邊之柱爲便登天。降大雨成洪水。即時此岩山崩流。而大佛殿之料材。河上無障下者也。

とあつて、良辨僧正と笠置とがふかい關係のあることを語つてゐるのは之を逸するわけにはゆくまい。わけでも良辨僧正の上足で、同僧正の東大寺別當たりし期間、權別當として良辨を助け東大寺の經營に盡瘁して大功あつた實忠和尚が、またこの笠置と頗る密接なる

所傳のあるのも、笠置の磨崖佛を考へる場合これを雲烟過眼視することが出来ぬであらう。といふわけは、實忠和尚こそは、じつにかの奈良高畑の頭塔の構築に主要なる役割を演じた當事者であつたからである。實忠和尚と笠置との關係は東大寺要錄にも見えてをり、要錄からその一部分を祖述したものと信ぜらるる笠置寺縁起にも載せてあるが、いま左に笠置寺縁起によつてその一節を引いてみよう。

天平勝寶三年<sup>辛卯</sup>十月。實忠和尚。自<sub>三</sub>笠置寺之龍穴<sub>二</sub>入而過<sub>三</sub>北方江一里餘。則都率之内院也。四十九院摩尼寶殿一々巡<sub>三</sub>禮之。其内諸天殊集會。而勤<sub>三</sub>修十一面之悔過<sub>二</sub>之處在<sub>レ</sub>之。號<sub>三</sub>常念觀音院<sub>一</sub>。和尚拜<sub>三</sub>聖衆之行法。模<sub>三</sub>此行<sub>二</sub>於<sub>三</sub>人中<sub>一</sub>可<sub>三</sub>勤行<sub>二</sub>之由伺<sub>三</sub>聖衆<sub>一</sub>。則告曰。此所一晝夜當<sub>三</sub>人間四百歲<sub>一</sub>。然者。行法軌則巍々不<sub>レ</sub>懈<sub>三</sub>千反之行道<sub>二</sub>於<sub>三</sub>人中短促之所<sub>一</sub>更難<sub>レ</sub>修。亦不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>坐<sub>三</sub>生身觀自在尊<sub>一</sub>者。何輒可<sub>レ</sub>修乎云云。和尚重白言。千反之行道者急走而修<sub>レ</sub>之致<sub>レ</sub>誠令<sub>三</sub>勸請<sub>一</sub>者。生身何無<sub>三</sub>降臨<sub>一</sub>乎云云。則天衆共議而許<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>之云云。

實忠和尚が、笠置の龍穴に這入つて兜率之内院を窺ひ、そこに天衆より十一面悔過の修法をうけたといふこの行法兜率祕法こそは、今も東大寺につたはる名高い修二會——二月堂御水取の行法——であるが、同和尚はこの行法を修するため翌天平勝寶四年に絹索院を建てて修二會を行ふとともに、同和尚の本願になる笠置正月堂に於いてもまた該行法を修したことが知られる。すなはち笠置寺縁起に

仍天平勝寶四年<sup>壬辰</sup>正月一日。於<sub>三</sub>當寺正月堂<sub>二</sub>二七晝夜六時之行法始被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之。生身之十一面觀自在尊乘<sub>三</sub>花皿<sub>一</sub>降臨給。則彼正月堂者。實忠和尚之本願御建立云云。

と述べてある。それゆゑ笠置と良辨僧正及び實忠和尚との關係は、そこに極めて密接なるものがあつたと認めざるを得ない。奈良時代以前に笠置山上によし寺堂の經營東大寺要錄に「笠置寺、右

寺天智天皇第十三皇子建立有<sub>三</sub>緣起<sub>一</sub>と見ゆがあつたにもせよ、これが寺觀の整備をみるに至つたのは、おそらくは良辨實忠の兩和尚の頃であつたであらう。爾來、笠置と東大寺とが並並ならぬ聯繫をもつに至つたのも、上述のごとき緣由に負ふところ所在といふも決して誤りではない。東大寺要錄にも「元慶元年笠置寺八講始行」と特記し、南無阿彌陀佛作善集に據れば、東大寺重源上人の手で宋板般若經一部と鐘一口が、笠置の般若臺解脫上人の住房へ寄進されたのも決して故なきことではないのである。

以上縷記するところによつて、笠置の本尊たる彌勒石像が、その本尊たるのゆゑを以て寺觀備れる頃の造立、乃ち奈良時代後期のころの造顯に係るものと推定するを以てまづ不可なきものと考へられよう。蓋し笠置山は良辨實忠の兩僧によつて彌勒淨土に比定せられ

しものに相違ない。元來、良辨僧正は法相の大徳義淵の高足で、彌勒佛の化身といはれ  
三國佛法、兜率願生の誓願をもつてをつたと思はれることや、また實忠和尚が笠置において  
傳通縁起

兜率宮軌の祕法を授かり、その行法を修するため正月堂を建立したといふことなども、も  
とより見逃しがたいことがらであるに相違はないのであるが、奈良時代に於いて彌勒淨土  
信仰の思想が、相當浸潤をみてをつた事實もまた之を看過するわけにはゆくまい。

奈良時代の彌勒淨土の造像例としては、興福寺中金堂の彌勒淨土や西大寺彌勒堂の彌勒  
淨土の群像がある。これらの造像例については、龜田孜氏の奈良時代の彌勒淨土古美術第十  
卷第十一號

の一文に詳細なる論考があるからここでは省くが、いま岩周巢氏が笠置寺石佛古圖につい  
て史迹と美術  
第八輯ノ三

國華には多武峰曼荼羅と題し本  
圖を多武峰本尊阿彌陀如來像と

說明をみるに、中尊彌勒佛の像容は全く大野寺の磨崖彌勒像と符節を合してゐる。壺形の  
二重圓光のうちに、通肩の納衣をつけた如來形の彌勒佛が、右手を施無畏印に結び左手を  
屈臂印にむすんで、踏みわり蓮臺の上に起立してゐるところは兩者まったく同一である。

興福寺別當次第卷三の大野寺彌勒石像造立のことを述べた條下に

奉彫彌勒立像、蓋笠置石像以寫規模而已

とあつて、彌勒像を奉彫するにあつて笠置の石像を以て範とせしことを述べた記載や、

大野寺所藏の石佛縁起と題する卷子本に、菩提房といふが笠置より彼像を奉寫してその下  
圖を持ち歸り、該下圖を石上に配指して縦廣の分量を注したとある記載の、まづたく虚構

ならざることを痛

感せしめる次第で

ある。

ただ大野の彌勒

像と異つてをる點

は、笠置の石像で

は、彌勒佛の左右

に羅漢形の人物が

配されてゐる點で

ある。兩方とも立



笠置寺彌勒石像  
仁和寺本彌勒菩薩畫像集所載

像で、向つて右の羅漢形は柄香爐を持ち、左の羅漢形は納衣を捧げてゐる。この協立の二  
人像は、法相宗傳法の祖師無著世親の二大士をあらはすとの説もあるが、さうではあるま  
い。これは疑ひもなく増一阿含經第四十四に「彌勒如來當取迦葉僧伽梨」著之。是時



迦葉身體奄然星散。是時彌勒復取三種香華一供養迦葉。」と説くところの大迦葉と羅睺羅の二羅漢をあらはすものである。興福寺所藏の羅漢像でこれと同様の形像を示す彫像は、後世なにびとかが無著世親の像に附會せるものであつて、元來は大迦葉と羅睺羅の二比丘像であるに相違ない。すなはち納衣を捧ぐる老羅漢は大迦葉尊者で、彼は釋尊付法の傳衣を尊前に捧ぐるさまであり、栴香爐を執る羅漢は羅睺羅尊者である。したがつてこの笠置の彌勒石像は、彌勒菩薩が成佛して如來形となつて下生し、龍華樹下三會の説法をこころみる姿をあらはしたものであらう。藤原宗忠が中右記においてこの石像を拜し「皆逢三會之曉、悉結一乘之縁」を得た喜びを述べてゐるのも洵に尤もなるしだいである。

ところで、足立康氏はその笠置寺曼荼羅建築史第一卷第一號の論考に於いて、康和三年の所述と信ぜらるる彌勒菩薩畫像集所掲の笠置像を検出して、その蓮座の形式が踏みわり式蓮座でなく、一の大蓮座に描かれあることを注意せられ、踏みわり蓮座の大野像は、それゆゑ笠置像を描きながらも、その細部にあつては鎌倉時代の好尚を取り入れたものであると解釋されてゐる。然るに上記國華誌所載の笠置像をみるに、紛れもなく踏みわり式蓮座に描かれてゐるのである。踏みわり蓮座が、鎌倉期に入りて多く採擇せられし蓮座の形式であるこ

とは之を認めるに吝かではないが、しかし鎌倉期以前では全然存在せぬ形式であるわけではない。上代佛教圖像には踏みわり式蓮座は屢々あらはれてゐる。繪畫にあつては玉蟲厨子密陀繪の帝釋天がそれであり、當麻曼陀羅の相迎會の如來形がそれである。浮彫にあつては大佛殿前金銅燈籠扉の天人像がそれであり、彫像にあつては大安寺の菩薩形立像がそれである。なほ注意して検出すれば斯かる作例以外に多數の例證を擧ぐる事が出來ようがそれはそれとしてこの踏みわり式蓮座が、一概に之を鎌倉以後の形式であると目することは甚だしき失當であると曰はざるを得ない。大野像においても然るがごとく、この笠置の彌勒像もまたその像容はやや體軀を斜めに起立せるところを現はしてあるから、圖像上の約束よりいつても踏みわり式蓮座を採用することが、その像身の安定上もつとも好ましいものと信ぜられるのである。いはんや國華誌所掲圖には立派にそれが描かれてある點を考へると、笠置像が、單に彌勒菩薩畫像集所載の圖のみをもつてして、踏みわり式蓮座でなかつたと看做される足立氏説にも、遑かには同じがたいふしがあるやうにおもはれる。尤もこの仁和寺本彌勒菩薩畫像集以外に、久原文庫の藏本で彌勒菩薩像集といふがあり、これにも大蓮座上に起立する笠置像を描いてはあるが、この久原本圖像集は正和元年唐招提寺の僧雙珠の手寫せるもので、まづたく康和三年の前記仁和寺本彌勒菩薩畫像集をうつし

たものであることが知られる。しかしいづれにしてもこの笠置の彌勒像は、從來考へられてきた造顯年代よりも遙かに古く、奈良時代末期の造立と推定して大過なきに近い。もし言ひ得可くんば、そこに良辨僧正の發願が考へらるるにしても、その造顯は、文書立證はないが、多分、良辨の資實忠和尚の手で企てられしものではなからうか。

ところが残念なることには、元弘の兵火に罹災して、石焼け損じ、彌勒像をはじめ、いづれの石像もその像容まつたく認めがたく、ただわづかに壺形に彫り凹めて光背とせる外廓線だけが舊によつて目睹されるばかりである。黒川道祐の雍州府志には釋無住の沙石集を引いて

山上岩石驚心目、其間有傑出之岩壁、其面彫刻彌勒地藏之兩尊、雖不知其作者、非凡工之所及也、古伽藍魏々然、此石像在堂内云、釋無住沙石集載笠置彌勒地藏自施彩色以來諸人崇信淺

といひ、乃ちこの笠置の本尊彌勒像が彩色を施され、それがために諸人の崇信あさくなり靈驗また減じたるよしを述べてあるが、然らばこの石像は造立後いつのころか美々しく着色を施されたことがあつたわけである。

しかしながら幸ひなることには、虚空藏石と稱するものが、ひとり兵火を免れて、尊容

舊によつて鮮かに、笠置の磨崖石佛の一端を今に示してくれるのは、せめてもの吾々のよろこびでなければならぬ。

この虚空藏石といふは、高さ四十二尺、幅二十四尺ほどあつて、彌勒石とはやや離れて断崖の絶端に位置を占めてゐる。これはこの石像のみがひとり兵火の厄をまぬがれた理由となるものである。やや傾斜した石面を磨きあげて、他の諸像と同じく筋彫で石面に菩薩形の坐像を彫出したものである。刻線は雄渾をきはめて些の澁滯のあとがなく、しかも著るしく弾力性をもつてゐる。これは立派なる彫刻であると同時にまた立派なる繪畫である。笠置寺縁起にこの尊を虚空菩薩と看做し

嵯峨天皇御宇弘仁年中。弘法大師空海。當寺於虚空藏之寶前求聞持法修之給。新明星彼石像指光給。則光跡石陷今在之。明星末代光指給。嚴重之奇瑞也。御歸朝以後ト云々

とみえてゐる。ただし此の尊が果して虚空藏菩薩なりや否やの點は、なほ十分調査の餘地があるであらう。頭上に寶冠をいただき、容顏殊妙身に袈裟を纏ひ、瓔珞にて莊嚴し、二臂で、莖ある蓮座に結跏趺坐せる菩薩形坐像である。光背は重圓光で、像容あくまでも雄偉莊重をきはめてゐる。蓮座は巾廣い單瓣で中央のものにて豎二尺三寸巾二尺八寸もあり莖部に寶相華文を纏綿させてゐるあたりは、まさに頭塔の石佛の光焰佛の蓮座や三尊像の



蓮座に比敵する優雅典麗の趣致を示すものである。この尊が何尊であるといふ點については、儀軌上からこれを觀察することは頗る困難で、寺記にいふ虚空藏尊も川勝氏説史迹と美術第十三輯ノ二所收「笠置磨の彌勒菩薩もそれを首肯するに多少の困難があり、管見を以てすれば觀音崖石佛小考」参照

——おそらくは二臂の如意輪觀音像ではないかと疑はれる。

二臂如意輪觀音の造顯は、奈良時代に於いては屢々その造顯例をみてゐる。東大寺大佛殿盧舍那佛の脇侍の一つもこの二臂の如意輪觀音の坐像であつた。要録卷第一には「四月八日始奉<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>大佛殿挾士觀音虚空藏二菩薩像<sub>一</sub>とあつて、そこには二臂の如意輪觀音像であることは何ら記載してをらぬが、鎌倉再興のさいの佛師定覺及び快慶所刻の脇士觀音像はあきらかに二臂如意輪の坐像であつたのである。すなはち續要録造佛篇に

同(建久)八年六月十八日始奉<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>左右脇士觀音虚空藏像觀音像坐像二臂如意輪<sub>一</sub>坐下在<sub>二</sub>

八天像<sub>一</sub>

願主左衛門尉藤原朝綱入道宇津宮

大佛師法橋定覺

丹波講師快慶

各作<sub>二</sub>半身<sub>一</sub>後合<sub>二</sub>一體<sub>一</sub>

虚空藏像同坐像

願主掃部頭藤原親能造<sub>レ</sub>之

大佛師法橋康慶

同 運慶

是父子也各作<sub>二</sub>半身<sub>一</sub>合爲<sub>二</sub>一體<sub>一</sub>

とあるがそれを證するであらう。二臂像は、如意輪陀羅尼經によれば、結跏趺坐し、顔貌熙怡、金色身を現じ、首に寶冠をいただき冠中に化佛菩薩あり、左手は開敷蓮華を持し、右手は說法相をなして、七寶瓔珞、種々の身を莊嚴して衆光を放つと見えて、笠置の寺傳虚空藏像とは像相一致してをらぬが、しかしながら覺禪鈔所引の石山寺所傳像は、二臂左手與願、右手蓮華を持するの像で、まさに右笠置の寺傳虚空藏像と合致してゐる。

笠置の謂ゆる虚空藏石の尊像は、左手を垂下して與願印をつくり、右手は母指と人さし指を捻じて持華印を結んでゐるのである。もとより無持ではあるが、この持華印は蓮華を持するのさまを諷示するものである。かかる契印はまた左手與願右手施無畏の印とも通ずるふしがあつて、十卷抄第六に「昔より造畫する所の二臂の像は、皆右手は施無畏に作し左手は膝上において與願印を作し、右足を垂下し磐石上に坐す。大和國龍蓋寺の丈六如意



笠置寺寺傳虛空藏像蓮座細部

輪像亦之に同じ。東大寺大佛殿の左方如意輪亦之に同じ、左足を垂下す。但し石山寺焼亡の時寺僧之を拜見す。左手は與願に作し膝上に安じて垂下す。右手には蓮華を持ち花上に如意寶珠を安ず」といつてあり、小野玄妙氏著の佛像の研究にも二臂施願無畏の像の目を載せて「是れ我國往古の造像に見る所なり」と見えて、何ら經說に據らざるものであることが知られよう。ところがここに興味を感じしめることは上記覺禪抄及び十卷抄所引の石山寺所傳像なるものが、東大寺良辨僧正の造立に成るとおもはるることである。すなはち東大寺要錄卷第一にも

天平十九年丁亥九月廿九日始而東大寺大佛盧舍那佛被<sub>レ</sub>奉<sub>ニ</sub>鑄<sub>ニ</sub>未<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>畢<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>無<sub>下</sub>可<sub>レ</sub>塗<sub>ニ</sub>件<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>佛<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>金<sub>上</sub>天皇御心不<sub>レ</sub>靜歎念御之間蒙示現御須告云近江國栗太郡水海岸頭山脚有<sub>ニ</sub>勝地<sub>ニ</sub>急建<sub>ニ</sub>立伽藍<sub>ニ</sub>安置如意輪觀世音并執金剛神像各一體<sub>ニ</sub>是也<sub>一</sub>石山寺とみえ、また同要錄卷六末寺章第九にも

### 石山寺

右寺聖武天皇遣<sub>ニ</sub>良辨行基婆羅門僧正等<sub>一</sub>所<sub>ニ</sub>創建<sub>ニ</sub>矣在<sub>ニ</sub>近江國志賀郡<sub>一</sub>

と記述してある。仍て稿者は笠置の寺傳虛空藏像をもつて二臂の如意輪觀音をあらはせるものと考へる。笠置寺も古昔は石山寺、長谷寺とおなじく東大寺末寺に列してゐたのである。要錄卷六末寺章第九

實忠和尚が十一面悔過を修するにさいし、何ゆゑに笠置山を選んだかといふ問題については、筒井英俊師はその二月堂觀音と十一面悔過學樂十三觀音の研究と題する論考で、天平時代に這入るとともに華嚴宗の興隆に伴ひ補陀落信仰が流行してきた結果、實忠がその觀音信仰の道場として笠置山を補陀落山の靈地に擬したからではあるまいかと推測してをられる。笠置山が夙に兜率の淨土に擬せられたことは十分推量がつくが、これがこの笠置において兜率を願生し補陀落を欣求するに至つた信仰上の傾向は、おそらくは筒井師所說のごとく實

忠の時代からであらう。すなはち彌勒信仰と觀音信仰との二つの思想が結びついて、兜率の内院に常念觀音院が設けらるるといふ思想の發生こそは、十中八九は之を實忠和尚に始源するものとみるべきであらう。斯く考へきたつて改めてこの寺傳虛空藏菩薩像に對すると、坐法も護摩坐のふるい形式であり、持物も示すところがなく、蓮座も單瓣であり、殊に池中より挺生せるさまを示す莖部の寶相華文といひ、舉身光の形式といひ、そこには藤原様式といふが如きものではなくして、じつに雄大豪宕きはまりなき、おほらかなる天平精神を感じるものである。

稿者はこの尊が軌前の圖法になる點より推定して、これまた本尊彌勒石像とほぼ同期の奈良時代末期の古密教による造顯と推する。寺傳では弘法大師の作と稱し、弘仁年中大師この虛空藏石の寶前にて求聞持法を修するとき、明星來影して虛空藏菩薩の像石面に顯然とあらはれた。仍て大師みづから彫刻の工をはじめられたものだとつたへてゐる。しかしこの所傳たるやもちろん後代寺家の假託に出づるものなること贅説するまでもあるまい。なほまた山内寶藏坊址に面した大巖石に、天文三年の年紀を示す來迎相の彌陀立像が刻まれてあるが、これは恐らくは元弘戰死者供養のための造立にかかるものであらう。

**泉橋寺の地藏石像** 泉橋寺は、奈良線の上粕から西南四五丁のところにあつてゐる。

關西線の木津からもわづかに半里の道程である。木津川の堤防下にあつて、畑なかに一とむらの松樹がみえるがそこが泉橋寺である。

天平年間、僧行基の開創にかかり、三代實錄には行基の五畿内に建立せる四十九院の一院であると出てゐる。往時は堂塔伽藍嚴然として、よほどの大寺であつたが、しばしば風火雷震の厄にあつて、現在では觀音堂の庫裡だけが残つてゐる。しかもこれとても近年の再建にかかるもので、辛うじて昔の泉橋寺の命脈をつないでゐるとでもいつた姿である。

ここの石地藏は、高さ一丈六尺餘の巨大なる丸彫石像である。右手に錫杖をもち左手に寶珠をとつて蓮座上に趺坐した坐像である。頭部の長さだけでも約三尺はあらうかとおもはれる。泉橋寺門前の左手になる石壇上に、巨軀を蒼空にうかばせて居るところは、なかなかの奇觀である。この地藏石像は、寺傳では、この寺の本尊であると稱されて、天平十三年勅を奉じて僧行基の造立するところと曰はれてゐる。古老の傳によると、東大寺大佛殿建立の際、木津川の流れの中に一大巨巖があつて、上流から押し流す材木を、向う岸からこの巖石に綱を張りわたして喰ひ止めたものである。ところが或る日のこと、水流の加減でか笠置あたりで材木が停滯して一向に流れて來ぬので、行基菩薩が祈禱をしたところ



泉橋寺の石地藏

恰度その結願の日に、大水一時に奔流して押し寄せたので、ために巖上にあつた人々は不意をくつて押し流されて死んだ。そこでこれらの水死者の供養として、件の巖石を刻んでこの地藏石像を彫出したものだとつたへてゐる。この傳説は恐らくは良辨僧正の傳説を附會したものであらうが、併しこの巨大なる石

像を刻んである石材そのものが天然生え抜きの岩石であるといふことは事實かもしれぬ。もと方八間の堂宇に安置しあつたと云ひ傳へてゐるが、現在この地藏尊の周圍に配置正しくのこつてゐる堂宇の礎石をみると、三間四面の堂宇であつたことが明かである。泉橋寺の諸堂宇は治承四年の平重衡の兵亂に焼亡し、のち再建なつたのをまた元弘の兵火に罹つて焼失した。そのときこの石像の首と雙手が焼けおち、爾來、永年の間、首も手も落ち毀れたままで、露佛となつて星霜を経てきたものらしい。

大島武好が、三十年の永い歳月をあげて大成した山城名勝志正徳三には「古津石地藏在年刊泉橋寺前今見像焼損御首落衣體又不定今有禮度一造新御首無堂宇」と見えてゐるが

この石像の修理されたのは元祿三年である。南都手揆の住人上田保重といふが、幼少の頃よりこの地藏尊にあつく歸依してをつたが、ある夜、ふしぎの靈夢に感じて、この石像の御首と雙手との再興を發願し、修理を加へたものと云ふことである。寺にはその再興の際の記録も残つてゐるやうで、泉橋寺の略縁起にもつぎの如き記載が見えてゐる。

いにしへの石像には同村玉臺寺辨天の日光石の片はれを用ゐるといへども、今たつる所なうして御靈山青密寺のすたれる跡の石をもつて、攝州大坂中堀乃石佛師を選て御首雙手を彫刻し奉る。開眼供養の導師當國玉水村性海律師、念佛供養の導師泉橋院當住正蓮社覺譽玄頂法師、元祿三庚午年八月五日開眼し畢

そこで現在の頭部と雙手とは、元祿三年の重修であることが記録の上から確定されるが、しかし製作自體から云つても、それらが徳川期の修造であることは明瞭で、彫技に徳川期通有の匠氣が見えてゐる。

一體この地藏石像は、寺傳では天平年間の作となつてゐるが、それを裏書するに足る有力なる證左はこの石像には何もない。蓮座の反華が廣がつてゐて東大寺大佛の蓮座と類似してゐるといふ説もあるが、これとても現在の荒廢状態では正確に測定することは困難であらう。



傳説に従ふと、昔、行基がこの石地藏開眼の日には、村民歡喜して、行基を中央に坐せしめ、琴を弾じ欣舞して周廻したといふことである。いまでも毎年八月の地藏盆にはここに盛大なる法會があつて、古例に則つて近在近郷の村民が多勢寄り集つて、盆踊をかねて踊り明かすさうである。なるほど行基を請じて彈琴し舞踏した由は、行基傳の根本資料である行基年譜にも記載はあるが、これがこの地藏石像の開眼供養の際であると云ふことは全く疑はしく、おもふに後代の何人かが、天平年中 聖武帝の泉橋寺へ御臨幸あつた際の出來事を假託して傳説となしたもののやうである。

この泉橋寺の石地藏は、しかし兎もかくも古くから諸書に記載されて、太平記の元弘元年八月 後醍醐天皇南都行幸の一節にも、「古津の石地藏を過ぎさせ給ひける時、夜は早ほのほのと明けにけり。此にて朝餉の供御を進申て先づ南都東南院へ入せ給ふ」と述べてあるが、この「古津」とあるは云ふまでもなく「木津」で、山州名跡志にもこの石地藏が大亂に回祿にかかりしことを述べた條下に「此像所々缺損所ニ載ニ太平記ニ木津の石地藏是なり」と見え、また都名所圖會にも「太平記に古津の石地藏といふは是なり」とも出てゐる。

なにしろ舊態をとどめぬまでに缺損してゐて、蓮座の臺石なども、ところどころ無縁の

墓石をはこんできて繕つてある上に、また雜草が茫々と生ひ繁つてゐる始末であるから、造立の年代を考定する何のよすがもないが、しかしその周圍に今も正しく残つてゐる堂宇が、この本尊を安置した堂宇だとすると、泉橋寺所藏の舊伽藍古圖に現はれた伽藍配置とは全く一致せぬばかりではなく、またその礎石からしてが奈良朝時代の様式でないことが指摘されてゐる。故に寺傳の天平年間僧行基の作とする説は、すこぶる信憑するに足らぬ説と見なければならぬ。或る學者はこの石像を鎌倉期か、もしくはそれよりも少し以前のものと推定してゐるが、造立の年代は恐らくはその邊のところであらう。とにかく丸彫の地藏石像として、かかる巨大なるものは石佛中にはしごく稀有のものである。

**西和束村瀧堂の磨崖彌勒石像** 磨崖彌勒佛は、西和束村字白栖の山林中にある。關西線加茂驛より北東約一里餘である。木津川に架した恭仁大橋を渡り、信樂街道を瓶原村に出で、和束川に沿うてすすむと、撰原村の北麓、河水清冽をきはめて急奔するあたり瀧堂と稱してゐる所がある。この河流の對岸に南面して大岩崖の屹立するのを見るが、彌勒佛はこの大巖面に陽刻されてゐるのである。

この石像は、巖崖の中央を壺形に彫り凹めて光背とし、そこに丈六の大像を浮彫にしたもので、相貌もおだやかな趣きを見せ、衣文の皺線も美しくあざやかで、蓮座のみが線彫



になつてゐるところなど、釜口長岳寺の彌勒石像と酷似してゐる。像の向つて右側に石面を磨いて造像記が陰刻されてゐる。刻字の磨消してゐるものもあつて判讀は容易でないが、木崎氏の大日本金石史第二卷にその彫銘を載せてあるから、いま左に同書からそれを引用しておかう。

爲尼法阿同子

萬壽丸僧實□

等往生佛國奉

彫之願主實□

正安二年四月

日當釋迦牟尼

佛滅度之後二

千二百餘歲比

釋迦紀元を用ゐた金石文は、木崎氏も指摘さるるとほり、鎌倉中期では往々見かけるところである。集古十種にも伊豆善名村の石塔にこの用例のあることが擧げてあり、安藝南生口村の十三塔その他にもこれが用例を見受けるが、石佛のうちこの釋迦紀元を刻したものは

は類例きはめて稀なるものである。口碑によると解脱上人の作だと云ひ傳へてをるが、あはるひはこれが解脱上人一派の僧侶の本願に依つて造立されしものであるかもしれぬ。願主の名の缺いてゐるのは聊か心残りである。これは川勝氏の説では興福寺僧實專であらうと曰はれてゐる。

この石像は一般に「彌勒佛」をあらはすと信ぜられてをり、その形相もあきらかに彌勒佛をあらはすものである。里人の傳へるところでは、むかし涅槃會などの日には、賽するものが相當に夥しくあつたといふことである。像容は極めて瀧坂朝日觀音の石像と酷似するものがあり、壺形光背の彫込みの浅いところや面貌のやや微笑をおびたあたりも殆んど同一で、この磨崖佛は、おそらくは瀧坂朝日觀音及びその附近なる磨崖彌勒像の諸石佛と同系統をひくものであらう。作者も或ひは渡來宋朝の石匠の手になるものかもしれない。瀧堂と字になつて残つて居るところをおもふと、もと此處には何か寺堂の經營があつたものに相違なく、村田家文書によると和東郷は舊大乘院（興福寺）領であつたことが知られるから、貞慶上人と何らかの關係のあるらしいことももちろん頷かれることがらである。

奈良の石佛

(出文協承認 5400315)



昭和十八年三月廿五日印刷  
昭和十八年三月三十日發行

(三、〇〇部)

定價七

圓  
郵送料 二〇錢

著者 西村 貞行

發行者 田中 秀吉  
大阪市南區西畷町一九番地  
會員番號二四三三

印刷者 馬場 祐次 鄭  
大阪市東淀川區豐崎西通三丁目  
會員番號西大八四

發行所 株式會社 全國書房  
大阪市南區西畷町一九番地  
振替口座大阪六四八二四  
電話東京 一八元・五八  
三三・六九  
三三・六九

支店 東京市下谷區西町八番地  
電話下谷六〇八・二五二三

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九  
日本出版配給株式會社

商業グラフィヤ印刷……安田製本

ミ

見かへり不動石像  
南生駒石佛寺彌陀三尊  
南田原磨崖彌陀像  
宮田不動像  
彌勒菩薩畫像集

二七五、二七六  
二六六—二六九  
一八五—一九〇  
三五  
三二、三六、三八、三九

ム

向洲の三體地藏石  
無量寺石塔  
室生寺附近の石佛

三三—三四  
三〇七、三〇八  
三九

ヤ

入尾廢地藏院石地藏  
柳生あたや地藏  
柳生の抱瘡地藏  
柳生の磨崖彌陀像  
藥師寺佛足石  
山田村鹿向谷斷碑  
大和陳迹名鑑圖說

三九四  
三〇九、三〇三  
一九五—二〇〇  
一〇一、一〇二  
三〇、三二、三三—三六  
三九〇  
三六二

山邊の濡れ地藏

三〇—三三

ユ

行 恒  
ゆるぎ観音

一八八、一九〇  
三三、三四

ヨ

鑑地藏

一〇

リ

龍門石窟寺

一〇、一三、一三

レ

靈巖院彌陀三尊

一〇一

ロ

鹿谷寺趾三尊像

三、三四—三六

ワ

和東の磨崖彌勒像

三、三二、三三